



## 喜多埜

## 日本最初の桜の花見

日本人にとって最も親しまれている花である桜は春の代名詞ともいえる花です。この季節には各地でお花見が催されていますが、この桜の花見を初めて催されたのが、当神社の御祭神であります嵯峨天皇であるというのあまり知られてはいません。

嵯峨天皇は唐風文化の摂取に積極的であられた事で有名ですが、同時に日本文化の原型を示された方ともいえ、弘仁三年(812)に神泉苑にて観桜の宴を催されたのが記録上もっとも古い桜の花見の記録であり、唐風文化を尊重するのであれば、牡丹や梅の花を重視されるべきところを、あえて桜の花で花見を催されたところに、嵯峨天皇の柔軟な美意識を階間みる事ができます。まさに和魂漢才を实践された事を象徴する桜の花見といえそうです。

## 天神様の冤罪が晴れた日

天神さまこと菅原道眞公は、昌泰四年(901)一月二十五日に佞臣の讒言により、無実の罪をさせられて九州の太宰府へと左遷となり、二年後の延喜三年二月二十五日に薨逝されました。その後、京都を中心に各地で天変地異が相次ぎ、これは無念の内に亡くなられた道眞公の祟りと恐れた朝廷は、延喜二十三年(923)四月二十日に、道眞公の位を元の右大臣に復し、正二位を追贈、左遷の詔書を焼き捨て、道眞公の冤罪を認めました。それから毎年四月二十日は天神様の冤罪が晴れた日として、各地の天神社では祝詞が奏上されます。

## 神社豆知識「鳥居」

地図の神社マークとしてもご存じの鳥居。地域と俗域を分けるものとして神社の入口にあり、まさに神社を代表する建造物です。

この鳥居ですが、どうしてこの形、この名前になったのか詳しいことは実は分かっていません。あまりにも古い時代から用いられてきた為、史料が存在しないのです。

しかし名称に関しては古い時代から国学者により考察され、常世の長鳴鳥が居る門、通り居る門など諸説が考えられています。

史料における鳥居の初見は、宝龜二年(七七二)二月十三日付の太政官符(行公文書)に「鳥居一基」の文字があり、これが初見とされており、既に奈良時代には「鳥居」の名称が用いられていた事が分かります。

鳥居の形状に関しては、天の岩戸を開ける際にニワトリを乗せた横木に由来するとか、天若彦という神様のお話に出てくるキジに由来するなど諸説あり、また近年では鳥の形をした木製の門のようなものが弥生時代の遺跡から出土した事から、インドのトラリーナや、朝鮮の紅箭門、ラオスのアカ族の習俗などに見られる鳥形の門に関連性を指摘する説もあります。推測の域を出ないのが現状です。

現存する最も古い鳥居は山形県山形市にある「元木の鳥居」で、平安時代の建立と考えられており、既に平安時代には今のような形式が決まっていたようです。

鳥居は中世以降、各神社の信仰や地域性を帯び、神明鳥居、明神鳥居、稲荷鳥居、山王鳥居、三輪鳥居、黒木鳥居など様々な形が生まれ、近年では素材も銅、コンクリ、チタン、陶器など多種多様となっています。しかし、そこにある畏敬の念に変わりはありません。

## 神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ソフトバンク、  
au、モバイルPC 対応



編著 網敷天神社 禰宜(神主)

白江 秀知

